



普連土学園校友会報

第 **106** 号

令和4年(2022年)2月15日

発行：普連土学園校友会

住所：〒108-0073 東京都港区三田 4-14-16

E-mail：friends@f-koyukai.com

責任者：松浦 栄子

TEL：03-3451-7700

FAX：03-3451-1959



下にお庭の木の後ろにかくれていました。また違う日には授業が始まる直前、

生徒がお庭から教室に走って入って来て「先生！手を出して！」と言ひ、びくびくとしているトカゲのしっぽを私の手にのせました。彼女たちの期待に反して私は叫びませんでした。

朝早く、校長室のカーテンを開けた途端大きなヤモリが私の足元に落ちてきました。その時も私は叫びませんでした。

大勢の校友生と同じように、普連土学園の中学校舎について私も特別な思い出が沢山あります。51年前に私が初めて日本と普連土学園に来た時、落成から2年しか経っていなかった校舎はとてもピカピカでした。中1の生徒たちもピカピカでした。初めての英会話の授業はいつも盛り上がりでしたが、ある日チャイムがなり中1の教室に向かうと誰もいません。待ってみましたが誰も来ません。しばらくすると窓の外から、クスクスという小さな声があちらこちらから聞こえてきました。クラスの生徒全員が柱の陰に、窓の下に、お庭の木の後ろにかくれていました。

それからあつという間に30年経ち、私は校長になりました。大好きな校長室は中1の教室と同じく小さなお庭に面していました。窓は東向きで、毎朝お庭の白い壁を超えてくるきれいな光が部屋に差し込みます。夕方近くになると西からの光はお庭の白い壁に反射され、部屋の中をもう一度朝のように明るくしてくれます。光にとっても恵まれた校長室でした。仕事をしながらお庭の方に目を向ける時、石の上でひなたぼっこしているトカゲたちや木の中で静かにおしゃべりしているメジロたちを観察するのは大きな楽しみでした。時々驚くこともありまました。ある日の

私が一番にお伝えしたいのは、中の世界と外の世界の間に隔たりのないこの校舎の魅力です。その境目はとても柔らかです。「外に遊びに来て！空を見上げて！ペランダからペランダへ友達に声を掛けて！かくれんぼしようよ！」と校舎が誘ってくれるような構造になっています。

光と緑にあふれる校舎

普連土学園理事長 畠中 ルイザ

目次

紙上クリスマス礼拝
残す言葉
現中学校舎特集
校友生は今
ご存知ですか史料室
追悼 中岡和子さん

コロナ禍により、2年連続クリスマス礼拝の開催が中止になりました。冬発行の校友会報のこの頁には、例年クリスマス礼拝の記事を掲載しておりましたが、今回は「紙上クリスマス礼拝」と題し、出版委員が「イエスの降誕」をテーマに聖句と讃美歌を選びました。

紙上クリスマス礼拝

「イエスの降誕」

聖句

マタイによる福音書

1章18～21節

ルカによる福音書

2章8～11節

聖書や讃美歌をお持ちでも、手に取り開くことはほとんどないという方も多いと思います。この機会に懐かしく感じて頂けるよう画像してお伝えします。礼拝に参加をした気分で、ご覧ください。来年度はクリスマス礼拝が開催され、皆様と同じ時をもてますように。

*** 聖句 ***

●マタイによる福音書

イエス・キリストの誕生の次第はこうであった。母マリヤはヨセフと婚約していたが、まだ一緒にならないう前に、聖霊によって身重になった。夫ヨセフは正しい人であったので、彼女のことを公になることを好まず、ひそかに離縁しようとした。彼がこのことを思いめぐらしていたとき、主の使いが夢に現れて言った、「ダビデの子ヨセフよ、心配しないでマリヤを妻として迎えるがよい。その胎内に宿っているものは聖霊によるのである。彼女は男の子を産むであろう。その名をイエスと名づけなさい。彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである」。

●ルカによる福音書

さて、この地方で羊飼いたちが夜、野宿しながら羊の群れの番をしていた。すると主の御使いが現れ、主の栄光が彼らをめぐり照らしたので、彼らは非常に恐れた。御使いは言った、恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。きょうダビデの町にあなたがたのために救主がお生まれになった。この方こそ主なるキリストである。

残す言葉

128 回生(2021年3月卒)

128 回生が山本幸子先生の特別授業の時間に書いた「残す言葉」です。この「残す言葉」は毎年卒業する前に生徒全員が書いています。8年前の会報にも取り上げましたが、今回また普連土で6年間で過ごした直後の若い校友生の言葉を幾つかご紹介いたします。

◆特別授業で残す言葉を述べ合っただ。みんなの思っていることを聞いて感動した。学園を、友人を大切に思う気持ちが伝わり、心に響いた。

◆学園で多くの国際交流の機会、パナマやホバートからの留学生と積極的に触れた。奉仕活動を含め、多様な文化や価値観を学び成長した。

◆沈黙の礼拝で、一人で深く考える充実感を覚え、友達と



は離れていても信頼関係がなくならないことを知った。
◆他者を通して自分を見つめる機会が多い。礼拝の話、学園たよりなどを無駄にしないよう。自分と同じ悩み、自分に無い発想に触れられる。

◆毎朝の礼拝が普連土色に染めた一番の要素。フレンド派の精神が、人を受け入れ、自分を信じる事を教えてくれた。豊かな人生をこの精神で。
◆先輩の姿に刺激を受けて、応援団、指揮者、全校発表など次々挑戦した。目標をもって努力し、夢を実現していく喜びは貴重な体験になった。

◆中学で人間関係の悩みが多く高校ではそれが減った。それは自他に成長したから。これからは身の回りのことをこなしつつ親を支えたい。

◆友人や学園生活がこんなにも大



事なものになるとは思っていなかった。みんなに会えて、共に喜んだり哀しんだり。経験の共有を感謝。
◆完全には分かり合えない人間同士。しかし、互いの違いを肯定的に見ず、互いの良いところを認め合うことを学ぶと、人間関係が円滑に。

◆自分の意見を言うのが面倒になっていた私だったが、普連土で過ごす中に変わった。はつきりといえるようになって、深い人間関係が築けた。
◆学校へ行くのを嫌がったことが不思議なほど。休日が嫌なくらい学園生活を楽しむようになった。女子校だから、普連土だから築けた絆。

◆普連土で受けた授業は一つも無駄なものではなかった。人の意見をしっかりと聞く人が多い。普連土でしか経験できない礼拝を大切にしよう。

◆この6年間で、これからの人生

で何を大切に生きていくかの見通しがついた。「他者のために生きる」という信念を得られてよかった。
◆普連土では本当に人に恵まれた。皆心の奥が温かく人の幸せを喜ぶ人達だった。学園生活で愛の心を育てられた。

◆始めたことは続けよう。1年経てば辛いことも良い思い出。好きな授業はよく聴こう。得意があると頑張れる。
◆休校の後登校して気づいた。私の居場所はこの外に無いと。不満の元だった机や教室が落ち着きと安らぎの元。
◆沈黙の礼拝を経験して、気持ちを整理することが出来た。心が軽くなった。この時間を有効に活かして過ごそう。



◆現中学校舎の建設の経緯は

昭和39年（1964）6月の新潟を中心とする日本海側の大地震は東京にしながら船に乗っているようなゆれ方で、生徒の安全を第一とする建築の必要性を、ひしひしと感じさせた。創立80周年記念事業として、本校舎（現中学校舎）の建築を企画し、昭和42年（1967）4月に着工、昭和43年（1968）4月20日に落成、献堂式をあげるにいたった。



クリーム色の壁と緑の窓枠の旧中学校舎



机と椅子を持って引っ越し

◆建設費用はどのようにまかなったのか

父兄、校友会からの寄付、公共機関からの借入金でまかなったが、当時の松野財務理事と池田初子教諭は足を棒にして関係者を訪問し援助を求め、借入金を半分に減らすことができた。



池田先生と松野財務理事と大江宏氏

◆学園と設計者大江宏氏の

校舎設計と建築のコンセプト

学園側の要望は

- ① フレンド派の目指している簡素と堅実であること
- ② 生徒の手で容易に掃除できるもの

大江宏氏はこれらの要望を踏まえて、「15の教室が大小幾つかの群れにまとまりながら、それぞれに個々の場を与えられつつ、また同時に相互自由に結び合う」（後工時設計者挨拶）地中海地方に見られる柱と半円形のデザイン様式を用い、白い壁に赤茶の屋根で、

緑の中庭を持つ、教室の床材・窓枠は木製を主体に天井はワッフルに、出入り扉や収納棚などはオイルステイン塗装とし、玄関・生徒昇降口の外壁等には現在では製造不可となっている「焼き過ぎレンガ」を配して、従来の学校建築に見られる画一的に区切られた教室を持つ校舎とは違った斬新な校舎とした。大江氏は教師館（昭和33年）、山中湖寮（同35年）、講堂（同38年）の設計も手掛けている。

◆完成した校舎への反響

完成当時、部屋を借りたい外国人が訪ねてきたそうだ。

◆生徒たちの校舎への思い

◆中1の頃は、何故かとにかくクラス全員バルコニーに群がりたがる。

◆中2の時に、満開の八重桜をとっては、花びらを一階に向かってひらひらと舞わせ、担任に怒られた。4月末に八重桜の満開を見るのが楽しみだった。

◆入学試験の最中に、ふっと教室の外のテラスに目をやり、「なんて素敵な学校だろう」と思い試験を頑張った。入学してから友達とそのテラスを駆け回って遊んだ。

◆受験で初めて普連土の校舎を見た時、こんな所が日本にあるのかと驚いた。

◆今となつては時効でしょうが、屋根にのぼって遊んでいました。

◆ベランダ側の席になった時に、授業から一瞬気持ち離れ、外を眺めて考え事をするのが好きだった。



中庭





ベランダで遊ぶ生徒たち

◆歴史的建築物に選ばれる

歴史的価値を有する建造物のうち景観上重要なものとして、東京都景観条例に基づき、知事が選定したもの。平成28年（2016）に当校舎は選定された。選定基準は、

- ① 歴史的価値を有する建造物。原則として、築50年を経過しているもの。
- ② 東京都の景観づくりにおいて重要なもの。
- ③ できるだけ建設当時の状態で保存されているもの。
- ④ 外観が容易に確認できる（外から見える）もの。

◆校舎の現状と老朽化

中学校舎は竣工後、53年以上経過しており、様々な箇所が経年劣化している。特に屋根、外壁、ベランダ、ベランダ手摺、内部の建具など今後も計画的に修繕が必要。

◆どのような補修や修理が必要なの

緊急を要するのは、雨漏りの修繕。9・10月に2か所実施。1か所は中学校昇降口の階段上の天井で、雨天が続くとぼたぼたと水滴が垂れてきた。雨漏りの原因箇所の特定は難しく昇降口に面しているベランダの床をはがし、漏水箇所を調べなくてはならなかった。

- ・ 雨漏りを未然に防ぐため、壁、外壁に面している鉄扉や窓枠などの点検とこまめなメンテナンスが必要。
- ・ 廊下や階段のPタイルは、破損した箇所をこまめに取り替えているが、劣化の進み具合によって全面貼替えも必要。



おねがいします



ベランダの雨漏りの原因箇所



玄関昇降階段上の雨漏り箇所



重すぎる鉄扉



汚れた外壁



廊下のPタイル破損状況



・ 木製の窓枠も今後は金属製に変えることも検討。
 ・ ベランダの手すりのペンキ塗り替え。塗り替えは5〜7年に一度必要。
 ※毎年メンテナンス費用だけでも約1千3百万円位必要となっている。

◆校友生へのお願い◆

今までの種まきファンドの温かいご寄付にこころから感謝しております。お陰様で生徒の国際交流、教育と学園の緑化に役立てることができています。誠にありがとうございます。

今回の募金活動の目的には、中学校舎の維持を加えさせていただきますました。お城のようなこの校舎は50年以上の間生徒の毎日にすばらしい教育環境を与えてきました。緑に囲まれた楽しく入り組んだ構造のある校舎。光にあふれる遊べるベランダやテラス。この校舎をずっと大切に維持していくのは学園の方針です。しかし、建物が古くなるにつれて様々な修繕が必要となってきています。その為、中学校舎の修理や補修を種まきファンドの用途の一つにさせていただきます。

普連土学園の素敵な中学校舎を大切に、できるだけ長く維持していくという学園の方針に賛同してくださる卒業生に継続的なご支援をこころからお願いたします。

(畠中ルイザ)

校友生は今

逆境の中で・・・
105 回生 和田 恵真

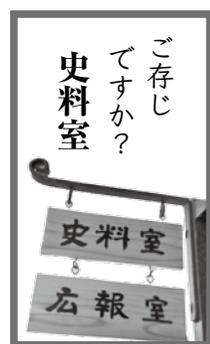
日本の魅力を世界へ発信する仕事に携わりたいと2008年にTOKYO2016 招致委員会の海外広報として入社しTOKYO2020 招致に携わり、2018年にTOKYO2020 組織委員会の国際局に入社しました。

2020年春までは、視察で来日した選手団への応対、選手団と日本の大学生との交流企画立案、選手村村長の活動調整等を行って来ました。準備も大詰めに差し掛かった時に新型コロナウイルスの影響により大会が延期に。国賓の来村も選手団との直接交流も不可となり、頑張ってきた仕事がほぼ白紙となりました。

心が折れそうになっていた時、普連土学園の同級生のお父様と仕事で一緒に恵まれ励まされていたとき、また辞めていく人も多い中で、残った仲間と「中止にならない限り安心・安全な大会

の開催に向けて頑張ろう」と支え合う事で改めて準備に取り組み事ができました。選手村村長と選手団との交流は可能な限りオンラインへと変更し、新しい形で出迎えることとしたのです。

「世界各国の人が同じ村に平和に暮らす」という世界平和の縮図のような選手村の様子を日本や世界へ発信したいという思いも全く叶わず、悔しさや悲しさもありましたが、沢山の選手団から「大変な中、色々工夫してくれて心から感謝している。開催してくれてありがとう。日本だから安心して参加することが出来た。」と貴重な言葉を頂き努力が報われた様在有り難しく感じました。未曾有の事態において賛否両論ある中での開催となり、大会が終わってからも、大会に携わった事を誇りに思っているのか悩む日々ですが、この経験を活かし、引き続き日本と世界をつなぐ仕事に尽力していきたいと思っております。



ご存じ
ですか？

普連土学園史料室では学園の歴史に関する史料の収集、整理、保管を旧職員と数名の校友生が行っております。

普連土の思い出として長い年月お手元に置かれていたものを処分なさろうとお考えの時には、ぜひ普連土学園史料室にお送りいただきたくお願いたします。

必要がある史料は頂戴して保管させていただきます、残りのものを学園で処分し、結果をお知らせいたします。

130余年もの長い歴史を持つ普連土の過去の史料収集には、昭和20年5月の空襲による類焼で全校舎を焼失したため、個人の手元に残るものが貴重な史料となっており、校友生の皆さまからのご協力が必要です。

特に戦前から戦中のものや、戦後の復興期のお写真、文集などの収集には困難を来しております、史料室に現存していないものでご寄贈いただけるものがあれば誠に有難く存じます。

ご寄贈いただいた史料は、皆さまが学んでおられたそれぞれの時代の証しとして保管に努め、普連土の未来のために役立ちます。

◎宛先は普連土学園史料室気付宅配便の場合は、平日着でお願いいたします。

お名前、回生、ご住所、電話番号をお忘れなく！

(普連土学園史料室)



史料室内部

普連土だより 学校近況

百七十七信

緊急事態宣言下で始まった今年度。休校措置こそ取りませんでしたが、4・5月中のクラブ活動は禁止、高3修養会は中止としました。体育祭は中高別で校内実施、久しぶりの行事であったためか特に高校3年生たちの熱気は例年以上のものでした。

7月に入り第5波により多くの活動を制限せざるを得なくなりしました。高校1年生のエンパワーメントプログラムは校内で実施することができましたが、クラブ合宿は昨年引き続き中止としました。

夏休み中の生徒活動は、生徒たちのメンタルへの負担に考慮しつつ、感染防止対策のため昼食なしの1つの活動のみで、最大2時間までとしました。そのような状況下でも生徒たちは限られた時間を大切に、クラブ活動や学園祭準備に励んでいました。やるせない思いもあったと思います。それでも感染防止対策に理解を示し、実践してくれたおかげで学内での感染は確認されずにいます。

第5波の収まらない9月には、

対面授業と授業配信のハイブリッド対応をしました。コロナ不安の生徒は登校を控えても授業を受けることができ、前期末試験は予定通り実施することができました。

10月の学園祭は、昨年と同様に開催および1日間での有志参加による開催。また保護者の方にも来校していただき、特に下級生の保護者の方はほぼ初めての行事参加でもあり喜ばれました。

11月に入り4学年で延期していた宿泊行事を実施。2年ぶりの宿泊行事とあってか、生徒たちの盛り上がりは例年以上でした。

全校礼拝は2学年が講堂で、他4学年は教室への配信によって行っています。感染防止の観点から讚美歌は歌えていません。

12月になり講堂にはクリスマスツリーが飾られました。クリスマス礼拝はハレルヤコーラスが中止ですが、中学3年生はグロリアを歌います。薛恩峰先生のお話を伺います。

今年度は平穏な学園生活を送れるよう願います。(松浦良知先生記)

八十歳になりました

傘寿を迎えられた66回生の皆様に浦口先生が描かれた絵葉書セットをお送りしました。

▲授業での先生、花壇の手入れでされている先生、思い出して胸が一杯になりました。メールしか送らない友達にこの絵葉書で便りを送ります。

▲生物の授業で先生が葉っぱを取り出して一生懸命説明して下さったお姿を思い浮かべております。

▲出来の悪い生徒でしたけれど、皆に草花の名前を「良く知っているネー」といわれました。先生に自然への親しみを頂きました。普連土時代に想いを馳せることができました。

▲先生には高3の時、担任をして頂き懐かしく思い出しました。大切にに使わせて頂きます。

▲普連土学園に入学して神の愛を学び、70年近い教会生活を守って恵まれた日々をすごしてまいりました。感謝です。

▲野の花の絵葉書、美しく素敵で、

思わずしばらく胸に抱きしめておりました。巣ごもり生活のため、庭仕事に楽しみを見つけ元気に過ごしております。

▲生徒として学園で過ごした6年間、その後1979年より講師として学園に迎えて頂き、音楽や聖書の授業を、生徒の皆さんと共に過ごすことのできた幸いは、何物にも代えがたい宝物のような30年間でした。

▲校友会、友人といまでも気遣い励ましあう事ができますのは、嬉しく有難く感謝しております。

◆お便りを下さった方々(敬称略)
伊藤文枝、井尻紀子、黒田典子、
漸井史子、鈴木郁子、田原淳子、
西村恵津子、早水恵子、筆谷越子



このページの内容についてのお問い合わせは、校友会事務局（03-3451-7700）まで。

校友会だより

◆2022年度の行事予定

・校友会総会

日時 5月28日(土) 11時～

開催方法は検討中です

・バザー

日時 11月12日(土) 10時～

・校友会クリスマス礼拝

日時 12月3日(土) 11時～

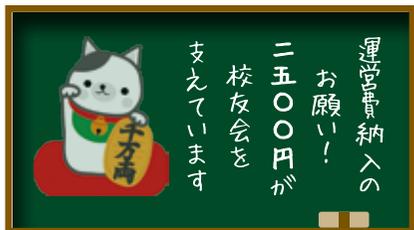
右記の行事は、新型コロナウイルス感染症状況によっては変更、中止となります。詳細はホームページ又は左下のQRコードでご確認ください。

◆校友会事務局よりお願い

校友会の今後の運営や事務作業のデジタル化を進めるため、お手伝い

◆運営費納入のお願い！
二五〇〇円が校友会を支えています

（ボランティア）いただける方を募集しています。詳細は事務局までお問い合わせください。



127回生 成人を祝う会

今年もコロナ禍ではありましたが、様々な感染対策を行い、1月



10日に102名の参加者が品川プリンスホテルに集いました。卒業がパンドミック発生時であったために、存分に別れの挨拶をすることが出来なかつた私たちにとって、とても懐かし、嬉しい再会でした。在学当時から特に元気が良かった127回生らしく、にぎやかな会となりました。先生方からのお祝いビデオメッセージが流れると、普連土学園での思い出話に一層花が咲きました。（林ゆりか）

中岡和子さんを悼んで

財務理事 大津光男

五代にわたる校友生の2番目、百寿を超えた中岡和子さんが、令和3年6月11日に永眠された。

44回生の中岡さんは、昭和16年に日本女子大を卒業後、家庭科の非常勤講師となり、戦争中はご母堂の富山とき校長を懸命に支え、昭和19年3月末結婚により退職された。

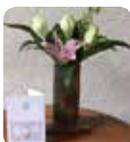
戦後間もなく東京月会会員となり平成30年に退会した。この間、普連土学園では、ご母堂の跡を継いで評議員や監事あるいは理事に就任して学園の発展に尽力された。校友会としてはバザーには必ず駆けつけ、総会にも出席されていたことは記憶に新しい。人生の長い間、自分の嫁や孫のみならず後進のためには助言を惜しまなかつた。ここに謹んで、ご冥福をお祈り申し上げます。次第である。



訃報

謹んでお知らせ申し上げます。心より哀悼の意を表します。

44	中岡 和子（富山）	21	6	11
46	茨木 春子（木村）	21	6	23
47	高木 康子（小山）	21	11	8
49	斉藤 信子（加藤）	21	6	24
52	A津村 和子（毛利）	20	11	1
53	芦葉 康子（松木）	21	4	8
57	大幡 順子（小島）	21	7	8
57	吉田 和子（河野）	21	9	3
58	中島 松江（花野）	19	11	13
61	賀川恵巳子（川上）	20	8	15
61	徳竹 喜子（井出）	21	9	10
63	久万 秀代	21	9	22
67	山本 幸子（中沢）	21	10	18
72	栗原千恵子（谷口）	21	8	9
73	新井 容子（小泉）	21	10	19
77	坂内 和子（奥村）	21	1	18



校友会より、お花とお悔やみカードをお送りしました。

編集後記

二年に渡るコロナ禍の中、メールやZoomを使って、106号を編集・発行。母校の情報や校友生の活躍をお届けしています。ご意見・感想を是非お寄せください。（入江・森本・富山・渡邊・白井・山田）

スマートフォンやタブレット端末からQRコードを読み取る校友会ホームページにアクセスします

